

日本語と中国語の指示詞についての対照研究

著者	胡 俊
ファイル(説明)	学位論文の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第5号
URL	http://hdl.handle.net/10232/21916

学位論文の要旨	
氏名	胡 俊
学位論文題目	日本語と中国語の指示詞についての対照研究
<p>日本語の指示詞は「コ-」系列・「ソ-」系列・「ア-」系列からなるのに対して、中国語のそれは「这-」系列と「那-」系列からなる。本論文は、日本語と中国語の指示詞の使用状況について比較対照を行い、両言語の指示詞の異同を明らかにしたものである。</p> <p>第1章の「現場指示における日本語と中国語の指示詞」では、指示詞の実際の運用にあたり、具体的な場面において、日本語では、物理的距離を基準にして、話し手は自分と指示対象との距離だけではなく、自分と聞き手との距離、聞き手と指示対象との距離も測りながら指示詞を使い分けているのに対し、中国語では、話し手はまったく聞き手を考慮せず、自分と指示対象との物理的または心理的距離だけを測って指示詞を使い分けている。指示対象の性質（例えば音など）によっても、日本語と中国語では表現の仕方が異なる。また、日本語と中国語との表現の相違等によるゼロ対応の場合もある、ということ論じた。</p> <p>第2章の「文脈指示における日本語と中国語の指示詞—小説の場合—」では、会話文の場合、日本語も中国語も現場指示用法とはほぼ同じ原理が働いている。一方、地の文の場合、中国語では、直前に述べられたばかりのことを指示したり、直前に起きた事実を指し示したりする場合には、「这一」系列が使われ、離れた過去に起きた事実を指示したり、登場人物にとって心理的に遠い指示対象を指し示したりする場合には、「那一」系列が使われる。これに対して日本語では、語り手が焦点となる登場人物の視点に立って、その人物にかかわるもの・事柄などを叙述する場合には、「コ-」系列が使用される。語り手が傍観者として指示対象を中立的な存在として語っている場合には、「ソ-」系列が使われる。登場人物が過去に体験したあるいは書き手がずっと前に提示したものや事柄などを指し示す場合には、「ア-」系列が使われる。この場合、書き手が読者を小説の中に引き込むレトリックの効果を持っている。後方照応の場合は、日本語でも中国語でも近称の指示詞が使われる。さらに、日中両国語の構文と語彙構造の相違によるゼロ対応の場合もある、ということ論じた。</p> <p>第3章の「文脈指示における日本語と中国語の指示詞—論説文の場合—」では、指示用法は現場指示のそれとストレートには結びつかないが、使い分け原理に通じるところがある。日本語では、著者が判断を下したり自分の考えを示したりするときの根拠になる内容を指示する場合は「コ-」系列が使われ、客観的に事実・出来事を述べたり、他者の行為・考えを指示したりする場合は「ソ-」系列が使われる。これに対し、中国語では、指示詞が基本的に直前に述べられたことを指示するので、近称の「这-」系列で指し示される。しかし、「今」から離れている過去（に起きた事実）あるいは未来（の出来事）を表わす場合には、遠称の「那-」系列が使われる。小説と同じく、後方照応の場合は、日本語でも中国語でも近称の指示詞が使われる。また、日本語と中国語の構文構造や語彙の違いによるゼロ対応の場合がかなりある、ということ論じた。</p>	

平成18年7月1日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 胡 俊

学位論文題目

日本語と中国語の指示詞についての対照研究

(A Contrastive Study on Japanese and Chinese Demonstratives)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を平成18年6月20日に行い、申請者による学位申請論文の内容説明の後、下記4名の審査委員から問題についての質問と、申請者による応答を行った。

胡俊の論文は、日本語と中国語の指示詞用法の共通点と相違点について、「現場指示」、小説における「文脈指示」、論説文における「文脈指示」の三つの面にわたり、具体的な場面に即して明らかにしたものである。両言語における「話し手」、「指示対象」、「聞き手」三者の関係の捕らえ方の違いを、同一の場面図式を用いて説明した点に独自性が見られ、また、音の指示の仕方に「音源」指示と「音響」指示の二種類がある、日本語では小説の語り手が登場人物の誰に焦点を当てるかによって、指示詞の選択に違いが生じるなどの指摘は、従来にない新しい指摘である。論証不足の箇所がいくつか見受けられるが、最終試験では、質問に対してすべて明確な回答が得られた。

以上により、博士の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合格 否

試験委員

主査 (氏名) 木部暢子

副査 (氏名) 三輪伸春

副査 (氏名) 廣瀬晋也

副査 (氏名) 江口 正

平成18年7月1日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 胡 俊

学位論文題目

日本語と中国語の指示詞についての対照研究

(A Contrastive Study on Japanese and Chinese Demonstratives)

論文審査の概要

1. 論文の狙いと概要

指示詞は、人や物などを指し示す働きを持ち、その内容が会話の場面や前後の文脈に規定される点で、他の語と性質を大きく異にする。多くの言語においては、指示詞は「話し手」を基準とする二系列体系をなしている。例えば、中国語では一般に、「話し手」に近いものを「這-」で、遠いものを「那-」で指し示す。それに対し、日本語の指示詞は「コ・ソ・ア」の三系列よりなり、「コ-」が「話し手」の領域を、「ソ-」が「聞き手」の領域を、「ア-」が「聞き手・話し手」共通領域の外側を指し示すといわれている。ただし、「聞き手」に関しては諸説あり、「聞き手」は指示詞の使い分けに関与しないとする説もある。また逆に、中国語の指示詞にも「聞き手」要素を考慮する必要があるという説もある。

以上のように、指示詞については従来からさまざまな議論がなされ、研究もかなり高いレベルにある。しかし、日本語教育の立場から見ると、不十分な点も多い。特に、「会話の場面や前後の文脈によって規定される」という指示詞の性質を考えると、外国人学習者に対しては、具体的な場面に即して「コ・ソ・ア」のどれを選択するかを基準を示す必要がある。

本論文では以上のような状況を踏まえ、日本語教育の立場から具体的な場面における日中指示詞の用法の共通点と相違点を明かにし、日本語教育に寄与することを目的とする。

2. 論文の構成

本論文は次の3章よりなる。

第1章 現場指示における日本語と中国語の指示詞

第2章 文脈指示における日本語と中国語の指示詞—小説の場合—

第3章 文脈指示における日本語と中国語の指示詞—論説文の場合—

いずれも日中、中日翻訳小説、翻訳論説文から指示詞の用例を抜き出し、詳細に比較対照を行うことにより、日中指示詞の共通点、相違点を明かにするという方法をとっている。翻訳を用いた理由は、同一場面、同一文脈を確保した上で用法を比較するためである。

第1章では、翻訳小説の用例を①「コ-」⇔「這-」、②「ソ-」⇔「這-」、③「ア-」⇔「那-」、④「ソ-」⇔「那-」、⑤「ア-」⇔「這-」の5つの対応パターンに分類し、それぞれにおける「話し手」、「指示対象」、「聞き手」の位置関係を整理することにより、次の点を明らかにしている。(1)日本語では、話し手が「自分」と「指示対象」との物理的距離を考慮すると同時に、「聞き手」と「指示対象」との距離を計りながら「コ・ソ・ア」を使い分ける。(2)中国語では、話し手が「自分」と「指示対象」との物理的距離を測りながら「這-」と「那-」を使い分ける。ただし、物理的距離よりも心理的距離の方が優先する場合がある。(3)「指示対象」が「聞き手」に近い所に位置する場合に、日中の指示詞の用法の差が最も出やすい。

第2章では、小説における「文脈指示」を比較対照することにより、次のことを明らかにしている。(1)会話文では日中ともに「現場指示」とほぼ同じ原理で指示詞が用いられる。(2)地の文では、日本語の場合、語り手が登場人物の誰に焦点を当てるかにより、「コ・ソ・ア」が使い分けられる。(3)中国語の場合、「指示対象」が時間的に近いか遠いかによって「這-」と「那-」が使い分けられる。(4)以上のように、「文脈指示」では日中で指示詞の使い分け基準が大きく異なる。

第3章では、従来の研究では取り上げられることの少なかった、論説文における指示詞の比較対照を行い、以下のことを明らかにしている。(1)日本語では、判断の直接の論拠となる内容を指示する場合に「コ-」が使用され、直接の論拠とはならない内容を指示する場合に「ソ-」が使用される。(2)中国語では、基本的に「這-」が使用されるが、「指示対象」が著作時から時間的に遠い場合に「那-」が使用される。

3. 論文の評価すべき点

本論文の評価すべき点は、一言語内における指示詞の使用原理にとどまらず、日中両言語の指示詞の共通点と相違点を、具体的な場面に即して明らかにした点である。特に、両

言語における「話し手」、「指示対象」、「聞き手」三者の関係の捕らえ方の違いを、同一の場面図式を用いて説明した点に本論文の独自性がある。

また、本論文で初めて明らかになった点も少なくない。例えば、遠くから聞こえる音に関して、日本語では「音源」を重視して「ア-」系列を使用するが、中国語では「音響」を重視して「這-」系列を使用するという指摘、小説の地の文において、日本語では語り手の焦点の位置によって「コ」、「ソ」の選択の仕方が違ってくるといいう指摘、論説文において、日本語では「指示対象」が著者の判断に直接かかわる内容か否かによって「コ」、「ソ」の選択の仕方が違ってくるといいう指摘などは、新しい指摘である。

4. 問題点と今後の課題

本論文には独自性や新しい指摘がいくつか存在するが、一方で論証が不十分な部分も多々見受けられる。例えば、中国語では物理的距離よりも心理的距離の方が優先する場合があるというが、それはどのような場合か、小説における語り手の焦点の当て方は、どのようにして計るのか、論説文における指示詞の使い分けに、文体が関与していないかなどについて、もう少し客観的な論証が必要である。また、本論文で示された指示詞の場面図式については、今後、その妥当性を日本語教育の現場で検証する必要がある。

5. 総合評価

以上のように課題はまだ残されているが、膨大なデータに基づき、独自の視点に立って研究を行い、いくつか新しい指摘を行っており、全体として博士学位論文に値するものと判断する。

授与する博士学位 學術

論文審査結果 (合)・否

審査委員

主査 (氏名) 木邨暢子

副査 (氏名) 三輪伸春

副査 (氏名) 廣瀬晋也

副査 (氏名) 江口正